

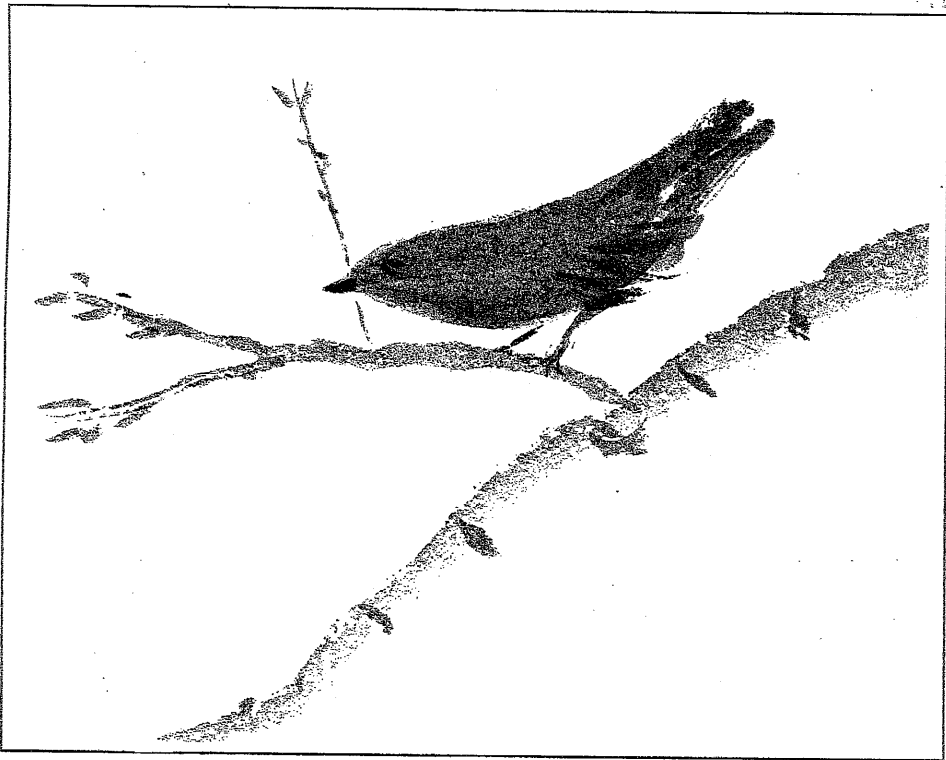
# オリーブの樹

第96号

2010年2月28日

## شجرة الزيتون

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



### 目次

- P 2 二月の歌 重信房子  
P 3 独居より 総身に冬の陽浴びて判決の  
駱駝が針の目通る日を待つ 重信房子  
P 12 重信さんとの交流コーナー  
P 13 基地反対の人ら集えるその中に二人の幼き吾娘も位置占む 森本忠紀  
P 14 読者からの声  
P 14 アラブ物語（8）—PFLPとの矛盾—73年ドバイ闘争の時代（2）

重信房子さんを支える会

# 二月の歌

重信 房子

面会室逝きし戦友語りつつ後輩涙ぬぐわず語りぬ  
 亡き母のバースデイなり冬菫東より来て我れを包みぬ  
 公判を振り返りつつ書く文は苦い怒りが湧きたってくる  
 雪明り一步一步と踏み固め歩哨の交代我らの砦  
 密やかに住み居た街の水仙の強き香りの朝市が浮かぶ  
 ぼたん雪地中海に溶けて春便り浜菊の黄一斉に咲く  
 春拓く鋭き寒さ強き程希望ふくらむ二月は好きだ  
 面会室つまずき多き人生と語る友には青春の笑み  
 吾子と会う伝えたいこと知りたいことあふれて時はたまゆらのごと



蛭居よい) 2月1日-2月24日

## 総身に冬の陽浴びて判決の駱駝が針の目通る日を待つ

重信 房子

2月1日 春未き基地はいらぬと各地より

日比谷に集いし日本は晴天

晴天だった1月30日を経て、2月1日は夜雪になりました。去年は正月からのイスラエル軍のガザへの無差別虐殺と日比谷テント村に象徴された年でした。ブッシュ政権の戦争政策の後遺症は、未だにアフガン、イラク、ガザと広がりつづき、世界各地に貧富の差を増大させたままです。日本もその例外ではない深刻さの中にあります。

こうした中、昨年、チェンジ!と政権交代によって日本も変化の兆しとその危うさの中で、新年を迎えました。新しい政治の変化で特権や利権を失う官僚や企業を中心とした政権批判は検察の小沢幹事長元秘書の逮捕にまで進みました。検察によるあまりに政治的な動きに呆れてしまいました。

その一方で、新しい政治の変化を求めて、国民の側から基地はいらないという声が強まりました。ことに1月24日の名護市長選の基地受け入れ反対の意志に示された流れは、沖縄から全国へと問題提起しています。

かつて、私たちは60年代日米安保条約に反対し、砂川基地、立川基地、北富士演習場反対など、各地で治外法権の米国の基地の廃止を訴え闘いました。経済成長の時代にあったために、こうした矛盾は押し留められながら、そのまま基地が存在しつづけて、今に至りました。不条理な基地との共存は、税金補填によって、あがなわれています。日本は「基地がある異常さ」を「異常」と思わないまま過ごしています。しかし、最早「反テロ」と騒いで、戦場や戦争を増大させる時代ではありません。反対に、貧困問題、地球規模の災害や環境問題を解決すること抜きに立ち行かない時代です。そのために、国家レベルにおいては、核や軍事力を放棄することによって、国際関係が成り立つような非核、非武装集団平和安保体制に向けたイニシアチブが必要な時代です。「冷戦」を経て、日米軍事関係も米戦略の不沈空母の補完部隊として、日本が機能する時代とは見切りをつける時でした。

しかし、小泉政権はアジアのかつての植民地国と信頼を築くよりも、彼らの台頭を恐れて、より米戦略に

自らを統合していく道を歩いてきました。これらブッシュ・小泉政権の歪んだ国際関係を正すのは、今を置いてありません。今、英国でも、ブッシュ政権のイラク占領を支持してきたブレア政権は正しかったのか検証に入っています。政治責任はこのように問われるべきです。同様に、日本にも小泉政権を問う検証機関を作り、真剣に責任ある結論を出すべきです。その検証の位置に、今、「沖縄基地問題」が必然的に登場しています。

「普天間基地はいらない 新基地建設を許さない 1・30全国集会」が2日前に日比谷公園、野外音楽堂で行われました。この集いに上京される友人が1日早く上京して、パンタさんと共に面会に来てくれました。基地を作らせないという切実な意志や獄外の人々の思いが伝わってくるようで、嬉しい面会でした。「さわさわ」の森さんも子供たちと上京し、TさんやSさんらも上京して、1・30集会に参加しますよ、と面会の時に知らせてくれました。

この集会はどんな様子か新聞を楽しみにしていましたが、いつもマスコミの紙面づくりには不満なのですが、小沢批判を煽り立てる紙面は無制限に大きく、この新政権の基本政策を問う民衆の側の1・30集会のような記事は、朝日新聞でさえ、とっても小さな記事です。マスコミの問題意識の関心角度がワイドショー並なのでしょう。昨日、小さな記事「辺野古移設反対を訴える」と載っていました。

日比谷音楽堂で、「フォーラム平和・人権・環境」自治労や労組などの実行委員会主催で、6000人ほどが集まったとのこと。平野官房長官が名護市長選の結果を「斟酌しなければならぬ理由はない」と述べて批判を受けている中、社民党党首の福島瑞穂消費者担当相が「辺野古沿岸での建設は不可能な計画だ。沖縄にこれ以上の負担を押し付けるな」と発言したと載っている程度です。

1月30日は晴天でした。デモ日和です。私たちも60年代、よく日比谷野音の集いが何かかにかあって、集まったものです。

30日には、ルーバーの隙間の空の青さに引き込まれながら、「基地いらぬ安保いらぬ空笑う日比谷に

集いし老若男女」と、歌が零れました。

昨日の友人の便りでは、菜の花の緑の蕾から黄色の花が二つ三つと咲き始めたお知らせしてくれました。もう一度雨が降ったら、春の気が満ち来る筈とのお便り。もう寒の中で、春の躍動がはじまっています。

私もこの時期寒いのが嫌いではありません。枯木立のような冬の大きな桜の木や椽の木に耳を当てると、風の渡るようなゴーという音がします。本当にそうだったか確かめたいのですが、今は叶いません。貝を耳に当てたら音がしたように。春に向かって新しい芽を幹のあちこちに準備して、樹液がめぐっている音だよ、兄だったか、小さい頃誰かが教えてくれて、この時期、木々に耳をつけて、春の音を聞くのが好きでした。今も、冬木立は内に燃えるエネルギーで、春を準備している頃です。でも週末の晴模様と違って、今日は曇り空。夜からは雪とのこと。

運動房に出ると、寒い中マリーゴールドが二つのプランターに、たくさんの花をつけています。他のプランターは取り除かれてしまい、この二つだけです。格子の隙間の庭を見下ろすと、ビルに沿って、月見草の枯れ草の下から小さな緑の草。蓬が萌えはじめています。

今日は2月7日にある反弹圧政治集会へのメッセージを送ります。昨年のおちよど今頃、反弹圧の集会に書いたのを思い出しています。癌手術のために、行き先も告げられず移監命令を受けたその夜、反弹圧集会（去年は2月8日）あてに、慌ててメッセージを書いたのを思い出しつつ、今日投函。

2月3日の去年の手術から早くも一年です。私の方もいつ判決が届くか分かりません。未決拘留者には、「拘留更新決定」が毎月裁判所から届きます。この手続によって、未決の被告を毎月獄中に拘留することが合法化されているわけです。私も逮捕以来、当該裁判所から毎月送られてきます。2月1日からの拘留更新決定は1月23日に告知されました。この書類の最高裁第三小法廷の4人の裁判官の名前のうち2人が変わっていました。新しい裁判官が加わったのなら私の膨大な公判資料を読みはじめて、判決を下すのに時間がかかるはず。判決が遅れるかもしれない……と思いました。弁護士に聞くと、最高裁には裁判調査官という役割の人が付いていて、その者らが論点整理を行い、最高裁判事はそれについて判断の審理をするだけなので、大して影響はないのだそうです。

数日前、思いがけず浴田さんから便りが届いたので、今日は嬉しい返事を出しました。前に短歌の本を送ったのに、栃木刑から、「好ましからざる人物からのものは受け取らない」と、受け取り拒否の手紙付きで返送してきたことがありました。（前に「オリーブの樹」にも書いたのですが）丸岡さんのところも、泉水さんのところも同じです。それであきらめていたのですが、いつか読んでもらえたらと年賀状を送っていたのが、1月5日に浴田さんに交付されたとお便りが直接届いて感激。そうかわったのか？ と、こちらも出すことにしました。

浴田さんは、去年は栃木刑で厳しい嫌がらせや「懲罰」を受けていました。今は新しい工場に変わって、元気にやっているとお便りでした。後8年がんばって、早く社会に戻って、いろいろお願いします！ と、便りを書いています。届くかな……。『好ましからざる人物から』として交付されずに満期出所の8年後に届く手紙になってしまうかもしれないけれど……。

午後の3時締め切りの投函時間まで手紙書き。友人からの藤色のきれいな胡蝶蘭と黄色のフリージャの匂いが房にたちまち溢れました。ありがとうございます。

先週お会いした宮崎先生からの本も届きました。楽しみにしていた本です。ありがとうございます。

## 2月2日 獄窓の隙間に広がる雪の原

### ベカー高原白海原に似て

起床して、ルーバーの隙間から遠くを望むと、真っ白。昨夜はやはり雪が降ったみたいで、2月のきらきらと光る陽射しが白い庭に降っています。晴天。

雪で何もかも埋めてしまうベカー高原の雪景色がすごいです。東京生まれの私は、大雪をレバノンで体験しています。平原で道を見失うと、車がくぼみにはまり込んで、立ち往生してしまいます。一度、吹雪の中、車輪がくぼみに落ちて、人通りもなく大変だったことがあります。

82年、イスラエルがペイルートを侵略した後の冬の大雪で、占領軍のイスラエル部隊にも死者が何人も出ましたが、日本大使館員も道で立ち往生して死んでしまいました。レバノンは、海岸は温暖でも、山脈もあり、冬は雪です。東京は昔よりも雪が積もらなくなりました。

「オリーブの樹」が届きました。ありがとうございます。「オリーブの樹」は第一審から発行されてきました。既に控訴審を経て95号になっています。判決後

は廃刊のつもりではじめていたのですが、「アラブ物語」の連載もはじめてしまって、どうなるでしょう。友人たちからは、廃刊せず1年に4回でも続けてと言われています。判決後はどう文章を書けるのか分かりませんが、「支える会」の友人たちの意向で、決めています。せつかくだから、年に何回かでも続けるようにしてもいいか……と。

午後は部屋検査。「えー！先週部屋検査したばかりですよ！月1回なのに！」と言いながら、部屋を明け渡しました。そうか、早めに2月検査なのか……。慌てて、投函用の手紙を携えて、他の房で待機。房に戻って少しして面会。奥平さんのことを書いておられる方と編集の方です。言葉には出さなかったけどもう判決で会えないだろうという思いを込めて会いに来てくださったのが分かり、心遣いを嬉しく思いました。良いものを書き、完成させてくれるでしょう。

夕方には、友人から、2月6日の「オール明治の集い」に上京するので、その折に面会に来るとのお便り。2月6日は、10年毎の「オール明治」の集会。今年は集いの3回目。2回目は、2000年11月、私のちようど逮捕された10日後くらいだったようです。これは、明大のプント系の自治会の同窓会のようなものです。今年は、55年～57年の砂川闘争の先頭で闘った、全学連書記長・都学連委員長だった明大の先輩土屋源太郎さんが伊達判決に関する情報開示請求行動の話などを講演されるそうです。その後各自が挨拶報告して、懇親会が行われるとのこと。

明大プントはどこか同志社の校風と似ていて、こういうことになると誰か世話人がいて、とても盛り上がります。仲間の助け合い精神も強くて、私も明大の昼間部、夜間部の仲間に支えられつつ、公判を闘ってきました。いつもお世話になっている旧友たちが「オール明治の集い」の世話人にいます。私からもメッセージを送って、それをメイに代読してほしいとのこと。メイが日本に帰国した時から、日本語学校など世話してくれたりしたおじさんたちなので、スケジュール調整できれば、やってくれるでしょう。

雪の珍しい景色を隙間に眺めながら、大学時代のことを考えていて、あ、そうだ、今日は「2・2協定」の日だ！と、思い出しました。

67年2月2日、明大学費闘争が突如大学当局と昼間部の闘争委員会のリーダーの合意調印で闘争終結宣言と、新聞の一面記事になってしまった日です。あれには仰天しました。1967年1月29日に、神田の

大学院校舎で団交が行われ、学生側と理事会側は、妥協点を探していました。すでに体育会右派とは暴力的な対峙と緊張がはじまっていた。もう入試もはじまります。この団交で、もう入試もはじまります。学費値上げ徴収分は、学生と合意の上で大学の改革に使うなどで合意しつつありました。値上げ撤回は難しい中、学園闘争としては、ぎりぎりのせめぎ合いの合意になりつつありました。団交中のその内容が十分でなかったこともあったでしょう。夜間部の全二部共闘会議や党派的な外部勢力を中心として、白紙撤回の徹底抗戦を主張していました。明大プント指導部は、徹底抗戦で闘う道は取らず、学生運動の自治における改良を合意点として、次の闘いの条件へと力を育てようとしていました。このやり取りの団交中、1月30日明け方、「缶詰状態の理事救出」に機動隊が導入されました。そして、バリケードが撤収され、30日付で「全学闘争委員会と全二部共闘会議の解散を命ずる」という学長の一方的な宣言文が告示されました。

2月2日に理事会と全学闘争委員長で、先の団交の話し合いの延長で、合意を公表してしまったのです。他党派（中核派）と再建全学連のへゲモニー争いもあったようで、明治出身の斎藤克彦全学連委員長は拠点を温存したかったのでしょうか。また、このままでは、これまで積み上げてきた要求もすべて無になり、学生に言い訳が立たないという一部の全学共闘委員会のリーダーたちの思いもありました。学生大会という民主的な手続合意を経ずに、大学当局とホテルで2月2日明け方に合意を発表したのでした。内容的には、30日の妥協案の延長上でしたので、学生大会で公開的に示し、また、大学内で堂々と当局との合意をやったら、流れも違ったでしょう。

当時は右翼の暴力に、活動家たちが大学に近づけないこともあって、機動隊導入から一気に明大プントのリーダーたちは、逃走してしまっただけでしょう。「権力の私物化」と言われても仕方がない事態でした。

その日から、プントへの自己批判要求です。中核派によるプントへの暴力的攻撃がはじまりました。当時の学費闘争を闘った多くの仲間も、戦線を離れました。この頃の中核派のプントへのゲバルトに、ML派の畠山さんが駆けつけて、よく仲裁してくれました。「何かあったら俺に言えよ」と、いつも言っていたので、私がSOSを発したりしたものです。駆けつけて、よく仲裁してくれました。

残っていた少ないプントの人たちが、中核派に殴ら

れつつ中執の部屋に居座り、カッティングやスツティングしているのに同情した形で、再建されていく明大ブントに私も加わるようになったのは、67年春です。でも、今からとらえ返してみると、明大学費闘争は、学生運動の分岐点だったと言うことができます。

学生運動が党派政治に従属していくのか、相対的別個なサイクルを持って進んでいくのか。明大闘争はそうした戦後の全学連再建以降の闘い方を問うていました。もちろんもともと党派的勢力によって全学連再建となったのですが、学生運動と革命運動や、労働運動と革命運動という、それぞれの役割と結びつきが問われていた時代だったと思います。明大「2・2協定」の敗北から、党派間の競合に運動が収斂されて行くきっかけになったように思います。戦略を持って個別の闘いに勝利を重ねて闘っていく方法に無自覚だった、と自分を思い返します。楽しく正義と友情の中で闘っていたこと、それで満足していたような闘い方でした。「2・2協定」がきっかけで、ブントに関わっていたことを思い返す2月2日です。

2月3日 鬼打豆投げずに喰う腹の中

鬼なる想いを打ち捨てるべし

あまりに晴れやかな空。慌てて蒲団カバーをはがしてジャブジャブ洗濯。今日の運動房は青天井の南のB棟とD棟の間のベランダです。青い空には、夏の入道雲のようなもくもくとした雲。床は雪のせいで、水浸し状態のため、冷たいサンダルの上に座って、爪切り。冷たいけれど風は気持ちよい。

午後は、いつも「オリーブの樹」発送など、実務を支えてくれる「支える会」の友人の面会。息子と年末の冬休みに来たかったけど、面会日が詰まっていたとのこと。前にもあったすてきな息子は、今年中学3年生。楽しく生きてほしい若者の話しに、あつという間の10分。

夕方、高校時代の友だちから1月30日の高校の同窓会の近況レポートを送ってくれたとのこと。それから面会に来る予定を知らせてくれました。45年ぶり。もう顔も分からないほど変わっているかな。

それから、「日本赤軍私史」を読んだ未知の同世代の当時の活動家だった人からのお便り。当時の活動や東大闘争のことなどを自分の側から語っています。そして「あなたはある意味思い通りに生きてきて、獄に居ても、うらやましい」とあります。この頃は「日本赤軍私史」を出版したためか、見知らぬ人の手紙も届

きます。高校生までも、まじめな問題意識で問いかけてきます。交流はありがたく、嬉しいのですが、返事を書く時間が取れず心苦しい。

今日の夕食に、セロファンに入った節分の豆が添えられています。旧舎の時は窓の外にむけて豆まきをしました。新舎で密封パックになってからは、食べながら過ごすことにしています。内なる鬼退治です。

2月4日 春立つ日寒の風連れ雪連れて

判決を待つ独房寒し

今日は立春。起きると、庭に一面の雪。おとといの雪は溶けたはずなのに。昨夜もまた雪が降りたようです。今年一番の冷え込みの立春のようです。大寒が暖かだった分、これから寒波の冬が続くようです。それでも晴天のすがすがしい朝。空気も洗われたのでしょう。隙間の空は真っ青です。

今日は本の宅下げの日なので、本を送ったり、手紙を書いたり、バタバタしているうちにもう昼。新聞を開けると、「小沢氏不起訴処分」の記事。異常な小沢バッシングを検察が仕掛けていましたが、秘書たちから「小沢の指示」という検察の作文した文言の供述書が取れませんでした。検察の犯人に仕立て上げる手口である作文操作に屈せず、石川議員ら元秘書が踏みとどまったからです。日本では、供述書偏重の「証拠作り」を「検察官の能力」のように歪めてきた捜査ばかりです。「足利事件」に見られるような冤罪を生むのはそのせいです。

いかに供述書の記述のちょっとした操作で事実が変わるのか、句点なく一文書き下ろしで、起訴状を書き上げるのが上手かとか、くだらないことで争っている検事たちの自慢も直接聞いています。私の事件も、パターンは同じです。75年のハーグ事件の偽りの「供述書」で、事件を作り上げました。発言を変えたり、証拠にふさわしく供述書を書くのは、警察官であり、検事です。容疑者本人が書くものではありません。逮捕された側の被疑者は、それを一読して、署名指印する仕組みです。弾圧下に置かれた被疑者は細かく書いた文の訂正をいちいち「違います」と言いにくいのです。

「取調官に良く思われようと思った瞬間から敗北が始まる」と、教えてくれたのは庄司弁護士です。

小沢氏も2回任意取調べを受けていますが、公明正大に署名指印したことを公言しています。政治家であるので、そうせざるを得ないのでしょうか、調書は検察に有利な財産を作るためのものです。

私は、警察、検察の取調官に、毎度まず言いました。「予めお伝えします。私の方からお話しすることも、また調書に署名指印することはありません。公判で明らかにするつもりです。それでも良かったらどうぞ」と、出会いのはじめに、私は立場をはっきりさせていました。

私が話さないと分かっている、あまり追求してくることはないですが、一人の若い検事は手柄を立てようと必死でした。「『話せません』という1行の供述書を取らせてくれ」と懇願したり、2時間以上睨みつけて、嫌がらせの黙秘を本人がしていました。最後に「東京地方検察庁はテロリストの頭目の重信房子を許さない！ 獄中に閉じ込める」と宣言して別れて行きました。

私は、経験から調書をとらせるべきではないと思っています。ことに検察は被疑者を「推定無罪」などと考えているわけではなく、いかに犯罪者に仕上げて、起訴有罪率を100%に近づけるかと考えているからです。

今回は、小沢バッシングの世論を形成しえたので、一定検察も満足しているでしょう。これからさらに民主党議員ら含めて、政権への揺さぶりが激しくなりそうです。マスコミの小沢バッシングと、それに民主党の政権担当者の対応のパラバラさが国民からの支持率を下げています。米国にもきちんと言わず、官僚の中核検察にもきちんと言わず、「やらせていただく」的な鳩山首相のへりくだったおかしな用語の連発では、国民も呆れて当然でしょう。

国民の側からの世論の形成がますます問われています。反基地、反安保、日米関係見直し、検察批判などなど。

寒い立春に、チューリップとオンシジウムが届きました。やっぱり春です。

2月5日 オレンジの大輪のバラ開き日

横浜事件の無罪を知りぬ

朝運動から戻ってすぐ10時前に面会。明日の「オール明治の集い」に上京した友人が面会に来てくれました。健康を害していた友人は「今は大丈夫」と、まず健康の話。それに「オール明治の集い」はブント系の人々が多いので、明治ブントの仲間意識は強かったなあと、当時を語り合っただけで12分です。あわただしく面会は終わりました。

その後すぐに房に戻って新聞を受け取りました。一面に「横浜事件実質無罪」の記事の昨日の夕刊が届き



ました。「免訴」などと検察、裁判所が一体になって自分たちの誤りや犯罪を隠して、再審を拒んできた横浜事件です。今回やっと免訴判決を受けた元被告5人について刑事補償を認める決定を行ったことで、実質無罪を勝ち取ることができました。本当に長い間あきらめずに戦い続けたことに敬意を表したいと思います。この事件は警察官や検事の供述調書の偽りの作文をもとにでっち上げが行われてきた今と繋がっていること、今もシステム、方法は同じであることを、多くの人々に知ってほしいと思います。誰でもがある日突然被疑者となり、密室で偽りの供述所に圧迫署名で、犯人にされ得るという「足利事件」にも繋がります。闘い続けることの無罪の輝きを実感し涙です。

2月6日 ラジオより愛の賛歌の聞こえる午後 明治に集いし戦友らを思う

今日は房内整理をストップして、文章作業。明大の旧友たちは晴天の日、集まっていることですよ。

森本さんよりお便り。1・30の集いに、娘（5歳と10歳）と参加した楽しい様子、写真付きのお便りです。それに「さわさわ」旗を掲げた「さわさわ」スポーツマンの姿。1・30の集会の成功を伝えてくれました。これは是非「オリーブの樹」に載せたい内容です。

それに、私が「オリーブの樹」にも書きましたが、三井元検事の司法改革案に賛成した森本さんは、三井さ

## オリブの樹 第96号

ん宛てに手紙で賛意を伝えていました。そして、1月に満期出所した元高検の三井環さんとすでに合って話もされて、検察のデタラメな権力行使について司法改革で協力し合おうと語り合ったとのこと。明日2月7日の関西の反弾圧の集いにお誘いしたら、参加してくれるとのこと。

森本さんのお便りは意気盛んです。それに、いつ判決があるかもしれないので、「さわさわ」の仲間と森本ファミリー——家揃って会いに来てくれるとのこと。ありがたい「支える会」の仲間たちです。

友情の手紙は、私にいつも力をたくさんくれます。感謝。

### 2月7日 ルーバーの隙間の青き空見上げ

#### 反弾圧の集いに連帯

今日も晴天です。今日は「政治犯に対する不当弾圧反対集会」の日です。よど号や米国で不当判決監禁されている城崎さんや日本赤軍の仲間たちへの重刑弾圧や獄中処遇の改善を求めている集いです。森本さんら「関西の支える会」の人たちも「政治犯に対する不当弾圧に反対する会」や救援連絡センターと共に、呼びかけ人となっています。去年は「反対する会」のやり方で当事者の合意のないままに進めたことで西川さん、裕田さんから批判がありました。それらの誤りのために結集が小さくなってしまわないか心配です。また、反省と教訓が活かされ、新しい政権に対して、司法の変革に力を注いでほしいところです。三井元検事の参加も、いろいろな人と広く話し合う契機になればと思います。

鳩山内閣不支持45%で、支持41%を上回ったとか。また、小沢辞任要求は68%と朝日新聞。これだけ「小沢独裁」とか不正な金のことを書きまくってれば、当然のことでしょう。

また、死刑容認が増加し、85%に達したとのこと。これは死刑によって何も解決しない、報復でなく、生きて償うことを求める国際人権状況の情報や啓蒙がない結果を示しています。逆に、マスコミでは「被害者の人権」ということにかこつけて、厳罰化や死刑を煽っていることの方が問題です。日本は、被害者も、被疑者も、受刑者も、人権が守られていない現実こそ社会に伝えるべきなのです。

### 2月8日 四十年前の心のままにあり

#### 語りてしみじみ旧友はいいなあ

気持ちの良い晴。房内にはたくさんのお花。赤いチューリップ2本。オンシジウムのたくさんの黄色の蝶のような枝。白い胡蝶蘭と藤色の胡蝶蘭。シンビジウムは正月の差し入れが未だ枯れずにいます。それにオレンジ色のバラ4本が開きました。冬は花が長持ちして、花を見ているだけで楽しくなってしまいます。

今日は明大旧友の面会用の月曜日。「オール明治の集い」の後なので、上京していた下級生が3人。2人はすぐ分かったけど、1人は若くてハンサムで昔のHに似ているけど……。えー?! やっぱH?! と、大驚き。みな現思研の仲間たちです。「うわー嬉しい! まず先輩としていろいろご迷惑かけて、みんなに謝ります!」と言いながら、みんなとアクリル板越しに両手を合わせて、握手の代わり。みんなもわーと元気! やー元気そう! 変わってない! と口々に。「先輩の私が走りすぎてごめん! Hは赤軍派の頃居なかった気がするけど……」と言うと、「いやー7・6の時は、ここ小菅に入っていましたよ。3度目の逮捕で。4・28闘争で捕まっていたから」あーごめん、そうか……。横から「Hのお母さんに会いに行ったよね」とJ。そうでした。その時か? あの頃は逮捕されると、私たちは家族、母親、恋人に、みんなで心配しないでくださいと釈明していたのを思い出します。また、Hとか逮捕された時には、「グズラ」とニックネームの仲間が軍資金を少し渡して、彼はパチンコ屋に走ります。上手なのです。玉を一杯出して、タオル、歯磨き、石鹸や「ハイライト」を大量に収穫して、それを留置所の仲間への差し入れに持って行ったのを思い出します。

「S君はすぐわかったよ。S君も遠山さん一緒にやっていたよね」「ああ……僕は遠山さんが山に行くと言うので、東京で待っていて……。そしたらあんなことが起こってしまって……。その後にパクられました……」と落涙。そうだったのか……。みんな赤軍派で、苦労かけてしまったのですね。

Jは? そうだったよね。7・6事件の後、塩見、花園さんらが脱走した夜、Jは私にたたき起こされて、「車ですぐ行ってくれ」と言われて、「僕ペーパードライバーですけど」と言いながら、そのまま箱根を越えて、関西まで塩見さんたちを逃がしたんだよね、という話になって「ごめん! みんなに苦労させてしまったんだね」と先輩は平謝り。

「でもね! 現思研は、明大昼間部のブントも、中大も、早大の奴らも、羨ましがってたね」「心の軍隊、仲間は絶対助ける! って、助け合ってた」「あの時の

誇りは今も大切な自分の人生!」みんなで当時の現思研魂を口々に語り合いました。私の革命の心もまたアラブでの活動もやっぱり仲間第一の団結でやってたな、現思研の延長だなーとワイワイ。みんな逮捕の苦労の中で、たくましく社会的な市民権を得て、よく生きて来たと思います。

短い時間なのに、次々と現思研のエピソードも登場。「ホラ、アルパイトのマネキン運ぶトラックの幌付きの車の荷台に、マネキンと一緒に現思研仲間がぎゅうぎゅうに乗って、茅ヶ崎の海に行っただね、明け方の海で、重信さんパンツ一丁で泳いでいたね!」「いやー」だって、新入生の時、よど号の田中君と新宿のキャッチパーに連れ込まれたでしょ。ちらりとスカートまくただけでぼられて、文句言っただけで殴られて、けがして、有り金巻き上げられて。しょんぼりして、新宿から御茶の水まで歩いて帰ってきたね!」と私。「そうそう、僕も居たよ、その時」とH。ああもっと一杯語りたいね!

「オール明治の集いは80人くらい来たよ。」「メイちゃんちゃんとメッセージ代読した」「お母さんを越えてるなーというのがみんなの意見だぜ!」「校歌『おお明治』を歌おうと言うことになって、やっぱりインターが先だろう!と、インターから歌ったよ」「芸人のTが張り切って取り仕切った」

「時間です!」と言われて、また何度もアクリル越しに掌を合わせます。昔と変わらないなあ……。生きて合おうね!」「死ねないよ!出てきて文句言わなくちゃ」「お互いに元気でいなくちゃ!」「元気出た?」「もちろん! ありがとう」と私。楽しくやりあった、昔のまま。ありがとう。到らない先輩にいつも暖かい文句と励まし! 昔からだけだね。

房に戻って嬉しくて、すぐに他の現思研の仲間「面会に来たよー!」と3人組の報告をして、今日の午後の便にのせました。

午後には、スイトビーと蘭が届きました。ありがとう。

### 2月9日 パレスチナ世紀を越えし闘いに

#### 広島重ね敵を打つべし

今日の新聞に「外務省の外交機密費の一部が首相官邸に上納されていた事実を、岡田外相がはじめて認めた」との記事。しかし、官邸、使途の調査拒否の平野官房長官。公開によって権力基盤が揺らぐのは、官僚も自民党も、また民主党も利害があるでしょう。新政

権も変革をはじめてみてから、自分たちに跳ね返る所は避けたいといったところでしょうか。

午後は旧友の面会。ありがとう。不況の中、経営者の彼は大変なはずですが、いつものように漂々として元気そう。裕田さんの息子の話など子供たちの話し。彼も孫がもう居る話など。お互いに昔からの戦友なので、いろいろの大変さも分かります。「中東ハンドブック」とか判決後の準備資料もありがとう。また、会いに来てね!と、お礼ばかりの私です。

7日から日本を訪れていたアッバスパレスチナ大統領が8日鳩山首相と会談をしたことが報じられています。「鳩山首相は、中断している中東和平交渉の早期再開のため、『イスラエルに対し、東エルサレムを含むヨルダン川西岸への入植を完全に凍結するように要請する』と述べ、パレスチナ側には『暴力の停止の継続』を求めた」とのこと。この主張はイスラエルとオバマ政権にこそ求めるべきです。

去年のガザ虐殺攻撃を経て政権についたネタニヤフ政権は、和平の破壊者であり、交渉の余地はありません。次々とパレスチナ自治区やエルサレムの入植地での住宅建設を拡大し、やりたい放題です。これを止めさせるはずのオバマ政権は、クリントン国務長官がそれを止めるどころかイスラエルの安全第一で、イラン包囲や入植活動を凍結せずに、和平交渉再開をアッバス大統領に促しています。

アッバスもそのまま交渉に入れば、ファタハからも認められません。すでにナブロスのファタハの指導部は、現在のアッバス指導部がファタハで決めた革命評議会決定を実行しなかったり、決定権を独占している姿に我慢ならないと抗議の辞任をしました。彼らは第6回ファタハ会議決定の履行や人事変更や財政浄化などを訴えていて、それらが聞き入れられないので、1月30日に、抗議辞任表明したようです。

それに、パレスチナ自治区では、相変わらずイスラエルは勝手にパレスチナ人を逮捕しています。先日、イスラエル軍は併合占領している東エルサレムのシェワファト難民キャンプを急襲して40人を逮捕したのです。今日も引きつづいて「不法労働者摘発」を口実に、キャンプを制圧し、キャンプ内の病院にも突入したようです。不当な占領者が正当な居住者を「不法」として逮捕している現実。ネタニヤフ政権は「力による安定」をずっと唱えてきた道をまっしぐらで、平和は遠のいたまま、占領下パレスチナはますます悪化し



ています。

ネタニヤフ政権のゴーストのもと、イスラエルの外で、モサドの暗躍、暗殺も活発化しています。モサドは、70年代80年代90年代は、PLOの元情報機関リーダーなどを、盛んにヨーロッパからペイルート、チュニスまで戦場に連れて、暗殺していました。一昨年は、ヒズブラーの軍事責任者をシリアで爆殺しました。

今年はドバイのホテルで、1月20日に、モサドがハマスの軍のリーダーを暗殺したことを、29日にハマスが公表しました。ドバイ政府によると、イギリスやアイルランド、ドイツ、フランスなどの偽旅券の男女11人が立った24時間ドバイに滞在し、暗殺後すぐ出国したというのです。しかも、ホテルの被害者の部屋に潜入して、待っていたらしいです。ハマスのリーダーが部屋に戻ったところをエレクトリックショックで暗殺したとのこと。ホテルや空港のビデオに、その痕跡が残されているとのこと。疑いのある者たちは、逃げおおせたというのです。しかも殺されたハマスのリーダーは、シリア在住で、暗殺される1日前に到着したとのこと。ドバイ政府が2月に入って捕まえたのは2人のパレスチナ人のようです。

これからさらに、モサド-イスラエルの暗殺はつづくでしょう。パレスチナの有能なリーダーを無差別に抹殺するのは、イスラエルの建国以来のポリシーです。

それに、極右のリーベルマン外相はシリアへの攻撃を顕わにしています。「イスラエルは平和でなく地域を戦争に導こうとしている」とのシリアアサド大統領のイスラエル批判に対して、「シリアはレッドラインを越えた。見逃すことはしない。我々のメッセージは明確だ。次ぎの戦争ではシリアは戦争に負けるだけでなく、アサドとアサド一家の権力も失うのだ」と、リーベルマンは口汚く述べて挑発中です。

それは、レバノン・シリアが和解し、ヒズボラーの民兵武装抵抗も認めた中で、トルコとシリアが連携しているので、イスラエルが政治的脅威を感じている故です。現在のイスラエルネタニヤフ政権は、パレスチナ人への抑圧ばかりか、地域への危険な戦争を目論んでいます。

しかし、一方パレスチナの統一はエジプトの不正な仲介のために進展していません。2月からはシリアがファタハとハマスの仲介を申し出ているようです。「イスラエルのデタラメさの上に交渉はない。交渉に戻れとの国際的な圧力は、入植地を拡大しつづけるイ

スラエルのためのものだ」と、PFLPも和平交渉再開への圧力に抗議しています。

こうした時期のアッバス大統領にとって、日本が一番頼もしい後ろ盾です。入植活動の完全凍結を訴える日本の政策は、ありがたいのです。50万人というユダヤ人入植者がパレスチナの地を簞奪し、さらに増やそうとしています。欧州やアメリカはユダヤロビーの活動で、イスラエル政府の入植活動を本気で止めさせる気もないし、制裁を行おうともしません。パレスチナ側には、アメリカ・イスラエルによる制裁とガザ封鎖がずっと続いています。

頼られる日本も「正論」は言えても、実際にイスラエルにもアメリカにも立ち向かってくれるわけではありませんが、本気で、「すべての入植活動の凍結」(入植地の撤去ではないとしても)を実行することができるのはアジアの力と、アッバスらは考えても不思議ではありません。広島を訪れ、原爆慰霊碑に献花し、核と大量破壊兵器のない平和を訴えています。それは有為なことですが、でも、アッバスはまず自分の足下の平和のために、何にもましてハマスを受け入れて妥協し、占領に立ち向かうべきでしょう。

2月10日 送られし菜の花の写真飾りつつ

春を彩る独房暮らし

曇りの寒い日。昨年末で国の借金がまた最多更新。871兆円とか。国民一人当たり680万円。もっと抜本的な国の仕組みから予算の仕組みを変更しなければ、「必要性」は増大し既得権益共々借金は増加するばかりでしょう。アメリカの真似、アメリカのパラダイムから抜けた考え方が必要です。大量消費の米国の資本主義と、欧州の資本主義とも違うように、日本の資本主義を考えて、組替えて欲しいものです。

知人の編集長らの面会。ちょっと楽しい気分でおしゃべりをし過ぎてしまいました。

午後は様々な資料を交付されて、資料読み。高校同窓会の近況報告にはじまり、地域の活動資料まで。

2月15日 冬枯れの草の下より萌えいずる

小さな蓬に希望の朝の陽

寒い日続きです。12日(金)に訪れたメイも珍しく厚手のコート。週末は私も房の中で厚着をして文章作業や短歌作り。短歌は楽しいけれど、語彙を知らず文法も忘れた私には、なかなか深い味が出せないもどかしさがあります。友人に教えてもらい、添削しても

らい、学んでいるところです。

14日はバレンタイン。東拘では、バレンタインに昼食時、恒例のチョコレートが届きます。今年は不況のせい、小さ目の不二家のハート型ピーナツチョコ。

今日の15日も引きつづき寒い。午後は雨らしい。それでも、運動場に週明けに出て走るのは、寒さを切り開くようで、気持ちよい朝です。

戻ってすぐ、久しぶりの友人と面会。前に彼女が差し入れてくれて調法している冬支度の姿で面会。あっという間の12分です。

午後、私の出した苦情に対して刑務官より解答告知があるとのこと。去年の7月6日に巡視官面談で、提起したことへの解答です。一度も採用されたことないけど、繰り返し東拘改善の助言と考えて提起しています。5点の苦情について解答を伝えられました。

第1点目、病気の移監時行き先を告げられなかったため、持ち物の準備ができなかった点については、「不採決、施設側に不当な措置は認められない」第2点目、高等検察庁のやり方、手術後の大阪からの早すぎる再移監は腫瘍マーカーの上昇の原因という点については、「不決定、施設に関わる措置に当たらない」第3点目、病人が護送車に寝ていけるように改良すべしについては、「不決定、希望を述べたものに過ぎない」第4点目、大阪から東拘に戻った際、4回も人定質問を繰り返した。システムを変えるべきについて、「不採決、不当な点は認められない」第5点目、医療関係の官本を新しく種類も増やしてほしいは、「不決定、希望を述べたものに過ぎない」以上ですとのこと。いつもの解答です。でも区長は体調を気遣って、手術後の様子を探ねたりしてくれました。

夕方受け取った資料の中に「監獄通信」94号がありました。その中で、「新法前後の千葉刑務所服役体験」は当事者の方への質問という形で受刑処遇実情を伝えてくれるものでした。ひどい……、あまりにひどい実情に人権のない刑務所の問題は、保身官僚体質にあることが、よくわかります。成績を上げたい、または問題を隠蔽したいとする、保身の犠牲者が受刑者です。自殺未遂や問題があると、職員の前で首のすげ替えになるので、なかったことにして、薬漬けで飼育殺しのように入植に入れていたり……。外に漏れない以上、死んで終わりです。この当事者の人が千葉刑務所で起こったことを誠実に耽々とインタビューに答えておられる分、逆に実情が浮かび上がってきます。それに現場の裁量や権限が新法になって失われてしまって、職員も

創造的な役割が失われているとのこと。それは、東拘でもそうです。現場への規律や締め付けだけがきつくて大変そうです。

小沢幹事長は、検察と公正な判断を下したから自分が不起訴になったというような発言をしていました。これはひどい。自分の不起訴を検察の「正義」の論理として許してしまうのは危険です。国会の政治倫理審査会に検察を呼んで、検察捜査こそ検証すべきなのに。起訴された3人の元秘書にもひどい親分だな……。

今日までのところ判決はありません。「紙切れ一枚突然前触れもなく届く」と言われています。体験のある友人が民事ながら最高裁の棄却判決の書式のコピーも送ってくれました。判決までにやるべきことが減るより増えている私です。増やしていると言うべきか……。

これから反基地も司法改革もはじまる春です。5月までに決めるという普天間基地問題。可能性をシミュレーションし、夢想しながら、闘争戦術の多様な展開を考えてみたりしています。私の役割は判決に備えることなのに。春を迎えます。古い友人、新しい友人すべての人に感謝しつつ。

追記 2月24日

今日は春のよう。これから雪の2月はぬけて、萌える春です。

今日は診察。呼ばれて、3時半に診察へ。ドクターは残念そうに、また腫瘍マーカーが上昇したことを告げました。CEAは35(前回は26.6)CA19-9は30(前回は22)。ドクターはこれまでの抗腫剤TS-1に加えて、「シスプラチン」という薬を加える新しい治療方針を提案しています。

この「シスプラチン」は副作用が強いとのこと(吐き気などの消化器障害、白血球減少、骨髄抑圧、髪が抜けるなど)。私は上昇しつづける腫瘍マーカーを放置するよりも、改善の可能性を前向きに追求して、新治療をやりたいと答えました。興味を持ってやってみよう春です。

思えば今日は、去年大阪医療刑務所から突如また東京拘置所に戻された2月24日です。あの時は白梅が満開で、きれいだったのを思い出します。

今のところ判決文は未着。宿題と治療をしながら、春へ！春はやはり何かありそうな、根拠なく希望が生まれそうな気分。みんなの励まし、友情の数々に感謝！

## 「反ユダヤ主義」

辻 邦

### ■メディアへの介入

フォト・ジャーナリストの土井敏邦氏が先日、自身のWEBコラムの中で、昨年夏より二度、イスラエル当局のプレス・オフィスからプレスカード発行を拒否されたため、ガザ地区への取材が出来なかったことを明らかにし、イスラエル政府への抗議文を公表した。

イスラエル当局は「提出されたアサイメント・レター（推薦・委任状）はドキュメンタリー制作会社からのもので、報道機関からではない。ドキュメンタリー制作にはプレスカードを発行しない」として、カード発行を拒否したという。だが、本当の理由は違ったようだ。土井氏は以下のように指摘する。

——イスラエルの『イスラエル・ナショナル・ニュース』（2009年11月30日版）が、プレス・オフィスのダニー・シモン代表にインタビューをし、次のように伝えていることを知りました。

「イスラエルは、事実を伝えない反ユダヤ主義のジャーナリストは認めないと語った。シモン氏は、意図的に虚偽を伝え、ハマスの犯罪を隠蔽するための“イチジクの葉”の役割を果たしているジャーナリストたちがいると強調した」

つまり私がプレス・オフィスから「事実を伝えない反ユダヤ主義のジャーナリスト」の1人とみなされたことが、プレスカードの発行拒否の大きな要因の1つ

と思われま—

土井氏も指摘するように、イスラエル当局は、フォト・ジャーナリストとして彼が長年に渡ってイスラエル軍の蛮行を伝えてきたことと共に、元イスラエル兵たちが、パレスチナ人への弾圧や虐殺など、自分たちが行ってきた加害行為を告発したドキュメンタリー映画『沈黙を破る』を製作したことを重視し、彼を「反ユダヤ主義」と規定して、プレスカード発行を拒んだのだろう。

だがイスラエル政府は、何故それほどまでにメディアの動向に神経質なのだろう。自らの行為に絶対の自信があるのなら、何ら恥じることなくその正統性を主張し、パレスチナ人の「悪逆なテロリスト」ぶりを、メディアを通して世界に発信していけばいいではないか。それとも、内心では己の悪辣な行為を自覚し、恥じ入っているのだろうか？ その程度のささやかな良心は、シオニストの心にもまだ残っているのだろうか。

### ■歴史を冒瀆する言葉

過去、「反ユダヤ主義」という言葉が人口に膾炙されてきた。西欧キリスト教世界のマイノリティーであるユダヤ教徒は、「キリストを殺した連中」として教会権力やキリスト教徒から忌み嫌われてきた。彼らは偏狭で不衛生なゲットーに押し込められ、特定の服装を纏うことを強いられ、外出を制限され、馬に乗ることも禁じられた。時には理不尽な弾圧や虐殺——十字軍士が戦闘意欲を高めるため、ギリシアやパレスチナに向かう前にゲットーを襲撃し、ユダヤ教徒を殺戮した行為はつとに有名だ——に見舞われてきたのは、まごうことなき事実である。そして、このような蛮行を「反ユダヤ主義」に基づく行為であると規定することに対しては、一部の極右を除けばほとんどの人が同意するに違いない。

だが、ヨルダン川西岸やガザ、あるいはイスラエル「国内」で取材し、イスラエルが行ってきた（いる）数々の蛮行を世界の人々に発信することの何が一体「反ユダヤ主義」なのだろう？ イスラエル政府と軍の残虐行為を報道することや、理不尽に殺され、土地を強奪され、家を破壊され、砲撃や空爆に見舞われ続

け、それでも誇り高くあるパレスチナ人の生を伝えることが、何故「反ユダヤ主義」なのか？

本当はシオニストも気がついているのだ。自分たちの行為が間違っていることに……。彼らは心のどこかで恥じているのだ。「俺たちのやっていることはナチスと変わらないのではないか？」。だからこそ、それを打ち消そうとシオニストはやっきになっている。だが、そうやって真実と現実と背を向け、殺戮と蛮行を繰り返したところでどうなるというのだろうか。所詮そのような行為は、いびつに曲がったイスラエル国家と社会

の姿を映し出す鏡にしかならない。シオニストが自己正当化のために蛮行に走るほど、人々はその間にイスラエルの醜い姿を見出すに違いない。

命を賭けて世界中にパレスチナの現実を伝えようとする人々に「反ユダヤ主義」のレッテルを貼るのは、詭弁以外の何物でもない。同時にそれはまた、アウシュビッツの犠牲者をはじめ歴史の闇の中で理不尽に殺されてきた無数のユダヤ教徒を冒瀆する、恥ずべき行為でもある。

## 基地反対の人ら集えるその中に二人の幼き吾娘も位置占む

～1・30日比谷公園沖縄連帯全国集会に参加しました～

森本忠紀

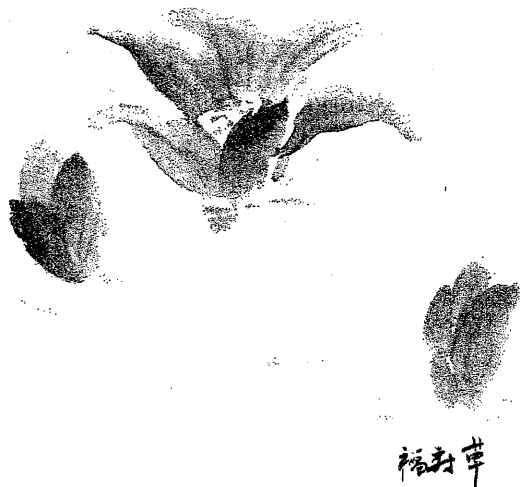
この日、2010年1月30日はこよなく晴れた素晴らしい天気、今も空の青さが臉に浮かびます。「沖縄の海を思わず晴れた空『基地いらぬ』と旗翻る」こんな短歌に詠まずにおれないほどでありました。タイトルに掲げた短歌はわが住む町大和高田で先日、公民館祭があり短冊に書いて、短歌教室の仲間20人と共に出展したものです。これは、沖縄の人たちと共同する集会が東京でありましたよとわが町の人たちに報告する、1・30集会の、巧まずして歌によるアピールとなりました。この公民館祭には公民館を利用して文化活動にいそむあらゆるグループが日頃の活動の成果を発表いたします。二人の娘、すぎな・なずなと鑑賞に出かけました。中に、小麦粉粘土で造花を作るグループが実演指導をやっておられて二人はそれぞれ、可愛い花を作りました。二人を指導し、花作りを手伝うのにその場に居合わせた女性がみなさん集まって来られて、楽しい人ばかりとなりました。すぎな・なずなが出かけるころ、いつでもこのように人の輪が生まれます。

1・30沖縄集会がまさにそんな人の輪の極みでありました。日比谷公園は全国から集まった人が通路まで席を占め、人で溢れ返っておりました。「基地いらぬ」「安保いらぬ」「戦争NO」と共通の意思で結ばれた者たちの一体感が会場を沸き立たせ、空気を揺るがしています。そんな空気の中にと、どんどん内から自然に昂ぶっていくのがわかります。人生を積極的に生きること、生きる上での前向きな姿勢と勇気。このようなともとも自分の内面、奥深くにある、それ



こそが人間の魂だとぼくは思いますが、そんな大切なものが、人間一人生きていたのでは決して確かなものとしては存在しなくて、人と人の繋がりの中にあって初めてしっかりと意識され、また、それ自身が成長していくものなんだということがよくわかります。

そんな圧倒的な大勢の人の集まりの中に一角を占める仲間たちの懐かしい顔があることは嬉しいことです。ここ数年、京都の10・21集会の前後から行動を共にするようになった、同世代、同じような年齢の友人たちです。すぎな・なずなは大歓迎されて席を譲ってもらって、おじさんたち、それもそろそろ年寄りの域に入りかけているおじさんたちの間に埋もれるように座っている様は、それこそその場を明るく潤す、「小さ



な花」、「可愛い花」でありました。そういえば、ぼくたちが若い頃、そんなタイトルで大ヒットしたザ・ピーナッツの歌があったことを思い出させてくれました。もっとも二人はじきに飽いてしまって、プランコヤ滑り台など遊具がある広場へと飛出して行きましたが、

去年の暮れ、京都の洛陽教会で行われた沖縄集会でデモデビューして以来、この日、日比谷公園から東京駅までのデモは二人にとって二度目です。主催者から配られたプラカードを胸元に掲げて行進する幼い二人は人気の的で、とっかえひっかえ周りの大人たちから声を掛けられ、友情交換するのに大わらわでありました。おもしろかったのはデモ終了後です。主催者発表で6千人とありましたが、これだけの数の人たちが行進すると果てしなく隊列が続きます。早い目に終えたぼくたちは歩道に立って後からゴールインする人たちを迎えておりましたが、次から次へと隊列がやってきて、延々とデモが終りになりません。なぜなら「基地いらない」と書いたプラカードをデモ隊に向けて頭の上で振ったものだから大変です。隊列の皆さん、大喜びで一斉にプラカードを振って応えてくださいます。ぼくたちはその場から離れなくなりました。「(振り続けて)手がだるくなったけど、やめられなかった」と、その後のなぜなの弁でした。

「袖触れ合うも多少の縁」という言葉がありますが、今や完全に死語になってしまっています。すぎな・なずなどと一緒に大人の集まりに出かけると、このことを

痛感します。ぼくたち現代人は気軽に人と出会えなくなっています。また、出会いを共同へとよう繋いでいけない。すぎな・なずなどはデモの最中、別の人から、トトロとジュゴンの折り紙を貰いました。帰ってから、折りがたをママに教わり、ジュゴンの折り紙とジュゴン保護を訴えるチラシを持って、大和高田駅前へでかけています。ぼくが三線でストリートパフォーマンス、「二見情話」を歌えば、隣で折り紙のトトロ、ジュゴンとチラシを道行く人に配ります。幼い二人にいっぱい学びながら、変革を願い、志す今日のごろであります。

変革へ心の騒ぐ春来る ちゅうき

## 読者からの声

★第95号ありがとうございます。カンパ送ります。暖冬予想を裏切る冷たい寒波もようやく遠のきました。いよいよ春ですが、この国の政治・社会問題は普天間基地閉鎖など、厳しい正念場です。光溢れ、熱ある人間、世を実現するために、基地撤去、戦争責任、棄民政策を具体的且つ早急に解決せんとあきませんね。最高裁判決を間近に、重信房子さんの体調・士気の健やかならんことを祈ります。

2月20日 大阪市 T. M.

## アラブ物語(8)

### PFLPとの矛盾—73年ドバイ闘争の時代(2)

#### 3. アラブ赤軍の仲間たち

アラブ赤軍のボランティア仲間は、キャンプ戦争の間、キャンプの内側に居た。医療・負傷者救援に尽力するから戦争が終わるまで退去せずに闘うからと、Dさんからメッセージが届いていた。DさんはPFLP日本人ボランティアの中でもリーダー的存在だ。はっきりものを言うが、いつもそれでよかったのかととらえ返す人で、私も一番頼りにしていた人だ。いつもDさんは大声でやりあうので、喧嘩していると勘違いするアラブ人も居るが、そうではない。本当はとても繊細で、心がやさしいのだ。

アラブ人たちの話こそ、私たちから見ると、いつも喧嘩しているように見える。感情をむき出しにして、

重信 房子  
ゼスチャーも大きい。日本からペイルートに着いたはじめの頃は、そこそこで喧嘩しているように見えて、驚いたものだった。でも、このアラブ人の、本音で人と人が向き合う良さを知って、アラブ人気質をすぐ好きになった。

そう言えば、日本人は感情や身振りを表に出さないし、口の開け方もアラブ人の半分より小さい。それにアラブ人が喧嘩をする時には、とたんに「ヤー、ハビー(愛する人よ)!聞きなさい」などと、スイートな表現をするのも面白い。60年代の日本人は、相撲の伝統か、よく取っ組み合いの喧嘩をしていたが、アラブ人が喧嘩をはじめると、組まずに何か腕だけで殴り合いしているみたいな感じで、ポカポカとやりあう。

それより本気になる、銃をぶっ放す。ここでは私の幼年時代の富山の菓売りの「一家に一箱」の菓箱のように、誰もが自衛武装の武器を持っている。そんな街の中での争いは、弱者同士、一族郎党、宗派部族は常に一致団結して闘う。イスラエルばかりか、レバノン軍に対しても立ち向かう。Dさんら日本人も、欧州からのボランティアも、キャンプのパレスチナ難民の生活に入り込んで、一緒にレバノン軍の攻撃に対抗していた。

リッダ闘争以降、新しい活動場所としていたバグダッドから、私は出産のためペイルートに戻ったので、日本人ボランティア仲間とは頻りに会えた。しかし、軍事的部署に居た仲間とはなかなか会えていなかった。軍事的部署は、バーシムたちの献身的な働きのおかげで、リッダ闘争後、それまでと様子が変わっていった。かつては、どのボランティアもPFLP保安局のチェックを経た上で、軍事活動を望むボランティアはまず軍事局に配属されていた。しかし、リッダ闘争後、日本人に対してそうしたチェックはゆるくなったらしい。そして、日本人軍事ボランティアに対して、当時、特殊な部局であったアウトサイドワークに直接招請されるようになっていた。バーシム奥平自身は、軍事訓練から、「軍事局」のボランティアを経て、特殊な「アウトサイドワーク局」に選ばれて、リッダ闘争へと臨んだ。

軍事局は、レバノンにある15の難民キャンプの34万~35万人のパレスチナ人の防衛や訓練を行う。もちろん、PLOや他のパレスチナ組織も同様に機能していて、PFLPだけがキャンプを防衛しているわけではない。また、PFLP軍事局は、他のパレスチナ組織と同様に、シリアやレバノンの南の国境地帯から、占領されたパレスチナに向けての潜入ゲリラ戦を行うゲリラ部隊を統率していた。

リッダ闘争を担当した部局は、軍事部局から独立して特別の秘密活動を行うアウトサイドワークであった。アウトサイドワークはペイルートでアブ・ハニが暗殺未遂のバズーカ砲攻撃を受けて以降、情報漏れを警戒して他の部局に対しても非公然・独立の活動体制を取っていた。アブ・ハニはパレスチナ解放のために、すべてを捧げて闘う模範的なリーダーであり、絶大な人気があった。決してえらぶらず、かつてキャンプで病人を診察したように各人に接する公平な姿勢もあって、誰もが慕うリーダーであった。当時、ハバシユより、アブ・ハニを自慢気にあげるPFLPの人が多かった。

非妥協の闘いの立案者として知られていたためだろう。

PFLPとしては、日本人に対する感謝と厚遇として、以降の軍事ボランティアをアブ・ハニ指揮下のアウトサイドワークへと受け入れていくようになった。このアウトサイドワークは、当時は志願してもすぐに受け入れられるわけではない、あこがれられる部局でもあった。1973年のドバイ闘争をきっかけとして、アウトサイドワークのアブ・ハニがPFLPと党内矛盾を作り出していく前の時代にあたる。

その時代のバーシムらのいわば後継者が、バーシム奥平に軍事活動の後を託されたニザール丸岡だった。彼は当初帰国する予定で、バーシム奥平から日本国内の任務分担を受けていた。すでに帰国して、バーシムたちの闘いの前に、仕事を果たすことになっていたユセフ・アハマドとニザール丸岡が帰国後話し合い、入れ替わってユセフが中東に戻るか国内条件に合わせて決めることになっていたようだ。

ところがニザールの帰国途中で、リッダ闘争を担った者たちの「第4の仲間」として、半ば容疑者扱いの「重要参考人」として、彼の名前が公表された。それで、ニザールは帰国を断念し、欧州から再びアラブに戻ってきていた。

リッダ闘争直後、イスラエルに拘束されたアハマド岡本は、仲間と共に死ねなかったことを悔いていた。イスラエルは、自供と引き換えに自殺させるピストルを渡すと約束した。もちろん嘘だった。岡本は、約束を守り、渡された銃をこめかみに当てて引金を引いたが、弾丸は入っていなかった。

この約束で、岡本はバールベックの訓練所やバーシムたちのことを語った。当初、ニザール丸岡については、帰国を助けるために供述しなかったが、後にニザール丸岡について語った。当時、私たちは本名を名乗り合わない。ニザール丸岡によると、日本から持参して着用していた高校時代からのジャージ上下に名前が入っていた。サラハ安田から「本名は伏せておかないとだめではないか」と、指摘されたという。そんな訳で、早々に本名が明らかになったために、謂れなく、容疑者扱いされた。

また、ユセフはリッダ闘争後日本で、別件逮捕されてしまっていた。

こうした新しい条件の中で、やむなくニザールは帰国して計画していた建軍をアラブの地からはじめることにした。そして、バーシムの仲間として、共同訓練をして来たいきさつから、アウトサイドワークを引き



継いだ義勇兵として、彼は以降の日本人の軍事ボランティアのリーダーという位置についた。ニザールは、72年、73年と何度か日本人や外国人たちと軍事訓練に参加してきた。そして、その際に、ニザールはPFLPの教官をサポートして、経験を積んでいった。

当時、リッダ闘争後「アラブ赤軍」を名乗っていたボランティア仲間の私たちは、PFLPの指揮下に入り、軍事ボランティアは、アウトサイドワークの指揮下に入っていた。軍事ボランティア以外の私や医療関係者や在欧の仲間たちは、それぞれのPFLPの部署の指揮下にあった。在欧の日本人仲間は、それまでも情宣局やアウトサイドワークの情報戦や調査に協力していた。

アウトサイドワークの調査の仕事のやり方では、ひとつのプロジェクトごとに、機密、課題、財政の条件の中で、指揮に従って活動する。在欧の非軍人のボランティアは、恒常的に拘束されているわけではない。志願と要請の関係にあり、後は自由だった。また、医療活動している者たちは、国際関係局や人民組織局など別の指揮下にあった。

私は、もともと、情宣局ガッサン・カナファーニの指揮下にあったが、ガッサン・カナファーニが暗殺され、その後政治局の指示でバグダッドに移動した。そして、イラク政府の許可のもとで、バグダッド中心に住み活動していたので、政治局の指揮下にあった。国境を越えた活動をしていたからである。所属自身は情宣局、国際関係局との共同をつづけた。



パーシムがいた時同様、ニザール丸岡が現場にいる時期には、アウトサイドワークと私の関係は疎かった。アウトサイドワークから私に何か頼みに来ることもなかった。アウトサイドワークは、公然とした活動や文書情宣などの活動を兼務するものは指揮下に受け入れないし、また、必要としていなかった。

このように、PFLPの指揮下といっても、志願と要請によって合意し、合意した後はそれぞれの部署の特性によって活動していた。自由に活動するオープンな場もあれば、アウトサイドワークのように、指揮と機密に制約される部署もあった。ことに「兵士」として志願した人材、または、アウトサイドワークが兵士として受け入れた人材には、厳しい機密が課せられて行動が制約される。その割に、政治的保証が果たされていないなど、矛盾があるらしかったが、当初はそれらも分からなかった。

パーシムの後を引き継ぎ、ニザールがアウトサイドワークのいわば中枢に触れることによって、こうした実情に、徐々に直面することになった。

ただ、当時、私は赤軍派以来の間違った組織観を持っていた。赤軍派には人民軍事委員会（CPA）と人民組織委員会（CPO）が、当初二大委員会として設置されていたが、「人民」よりも「我々がどう闘うか」に熱中していた。そして、思想的には、「軍事を非軍事部署が支える」という考え方であった。すべて武装闘争優先のために軍事第一で、非軍人はそれを支える位置にあった。その考え方は、組織を作るにあたって、ずっと私の頭の中の組織のイメージとして付いてまわっていた。この考えのまま、パーシムやニザールたちを支えていた。こうした私の考えは、軍事至上主義を助長していったと思う。他のボランティア仲間も、「プロパガンダの最高の形態は武装闘争である」とするPFLPの闘い方に共感していた。私と似たり寄ったりであった。

#### 4、アレイ山荘の仲間たち

先に述べたこのアレイ山荘では、いろいろなことに遭遇することになった。この山荘は私たちが住みだしてから、通称ヴィラ・フィルフィル（アラビア語で「唐辛子荘」の意）と呼ばれるようになった。それは、山荘の草の茂みの中を散歩していて私が見つけたのだが、たった1本の1メートル程の球体に広がったみごとな美しい木のような唐辛子が由来している。小さな赤い唐辛子が1メートル四方八方に球をなすようにみっし

りと実をつけていた。あんなみごとな「鷹の爪」のような小さな唐辛子は、アラブでは以降も見かけたことがない。

この山荘の広い2階の一角を、私とアラブ人の女性と日本人の女性やメイの寝室にしていた。保安隊の警備の指示で、敵の攻撃に備えて、2階の電気は常に使わない部屋に灯すように言われていた。そして、自分たちが使っている部屋には、分厚いカーテンで、電灯を遮るように準備されていた。これは、かつてPFLPの受けたペイルートでの攻防の教訓であった。

もちろんその時のペイルートでのPFLPの敵は、レバノン政府ではなくて、イスラエルである。バズーカ砲が打ち込まれた時にも、夜電気の点いている部屋か、寝室の位置が分かると明け方に寝室が狙われるらしい。

私たちは、保安警備隊の人たちの指示に従って、その山荘の2階に住みはじめた。1階には、警備の何人かが住み、彼らは敷地の一角のワイン用ぶどう園に出入りする農夫とも交流している。警護の者は、保安局の指揮下だが、かつては軍事局やアウトサイドワークなどで、かなり、戦闘や軍事の経験を積んだ兵士が抜擢される。

前に、リッダ闘争後の夏の時にも、やはり別荘地に避難して住んでいたのだが、オーナー役の警備隊員が、井戸が枯れたために共同の泉の井戸から水汲みをしたので、怪しまれてしまったことがある。サーバントと主人は同じことをしないからだ。そんな訳で、警備隊は畑仕事もできず、退屈である。私たちが顔を合わせるの、その警備のうちでも3人ほどだった。

私たちは山荘の警備の仲間早速仇名を付けた。これはいつものやり方であった。同じアラブ名の人だったり、また彼らの噂話を日本語で話している時でも、名前が出ると、「何？」と聞かれるので、アラブ人に呼称を付けて、日本人同士で呼び合ったりした。彼らにもオープンにそういういきさつも話し、ニックネームの由来も伝え、悪い意図はこちらにもない。この山荘の仲間には、「お庭番」などという名前を付けた。

「お庭番」と呼ばれる警備のチーフは、40代で歴戦の兵士であり、農夫の畑仕事を手伝いたくて、うずうずしていた。サブ・チーフは40台で、キャンプ出身の「文盲」ながら、アラブ文学を語る人で、文字を書けないことは何のハンディもない、と実証させる。アラブでは、コーランをはじめ、記憶の伝承は豊かな価値である。他に30代の議論好きの人、この3人が

直接私たちと協力し合う。

彼らは2階にはほとんど上がってこないが、夜地下室や建物内を歩き回ったり巡回しても音をさせない。忍者のようだ。それに、偵察飛行の音や車の音には、私たちが気づかないうちから体制を取る。敏捷なのだ。

一度、到着して間もない私たちが、生意気にも自分たちも平等にハラス（警備）に加わりたいたいと言いつつ、「お庭番」たちも笑いながら、夜の2時間ほどを担当させてくれたのだが、真っ暗な中あちこちにつまづいたり、音がうるさくてかえって迷惑だから、もう止めてほしいと、数日で失職した。

このパレスチナの彼らと心が通う仲間意識が強くなったのは、大喧嘩からだった。

山荘に移ってまだ日が浅い頃に、日本人の友人が訪ねてくることになった。ここまで連れて来ていいと判断された信頼できる人物の一人である。でも、警備の仲間とははじめての顔合わせになる。まだ午前中だった。客が到着したというので、私が1階に降りていくと、友人はすでに飛行機で買い込んだタバコとウイスキーを応接間の机の上に差し出そうとしていた。私は挨拶しながら、ウイスキーは会議後に昼食の時に乾杯しようと言ったので、「そうしよう」と友人もカバンにウイスキーとタバコの入った袋をしまつて、私の後に続いて2階に上がった。

私たちは、話に熱中していた。そうして、しばらく私たちはあれこれ話していても、昼食の呼び出しがない。こちら時間も忘れて話し込んでいた。

アラブでは、1時から2時から3時までの間、たっぷり時間をかけて昼食を取る。昼食がメインで、昼食の後は4時頃まで、昼寝をとるのが習慣である。任務中の飲酒は禁止だが、こんな稀に昼食時にウイスキーを飲むのは許されるだろう。私たちが作るものより、アラブ料理は自分たちが作ると言って、彼らはいつも昼食を作ってくれる。トマトと豆や肉の煮込みに、ふんだんな生野菜。玉葱とか、唐辛子、ハッカ、赤かぶ、レタス、レモン、キュウリ、トマトを丸ごと洗って、テーブル一杯に大皿やボールに入れ、並べる。自分たちで好きなだけ小皿にとって、ナイフでカットして食べる。これがアラブ式だ。肉のない時には、サムニという羊の脂とオクラとか豆を入れてトマトで味付けするし、野菜は庭からほぼ調達されている。

呼びに来ないが、もう昼寝時間だと気づいて降りていくと、飲めないはずのサブ・チーフがアラブという地酒を飲んで、真っ赤な顔をしてこちらを睨んだ。

## オリーブの嶺 第96号

(アラクはぶどうから作る地酒だ。飲む時に、氷を入れて水を加えると白濁する。)こちらは睨まれる覚えがない。怒っている。「どうしたの? 何があったの?」と聞くと、率直に言った。「何だよ。マリアンはあんただちだけでウイスキーを飲んで、我々にはやるなど言っただろう!」と言うではないか?! 「何でそんなこと私が言うの?! 心外だ! これまで私たち日本人がアラブ人よりも良いものを食べようとか一度だってしたことがあったか! とんでもない! ひどいじゃないか!」と怒鳴り返した。

そして彼は気づいた。私たちが一滴もウイスキーを飲んでいないことに。そして、ウイスキーもタバコも、客人は持って降りてきて、差し出している。私も気づいた。そうか、あの時の仕草か。友人がテーブルの上にウイスキーを出そうとして、私が止めて、カバンにしまって2階に上がっていった時のこと。「アラブ人には飲ませないで、日本人だけで飲もう」と、その時私が言ったと勘違いしたのか。客が自分たちに飲ませようとしてたウイスキーを、マリアンの一言で飲めなくなったと、彼らは誤解したようだ。マリアンたちを命がけで守っているのに、なんということだ! 水くさいと、3人は勝手にカンカンになって、ストライキをやったらしい。そして、食事も作らずに、安い地酒を買いに行き、「日本人が勝手なら俺たちだって勝手だ!」と、酒盛りになったという。他の2人は酒を飲まないで、もう昼寝中だ。

「なんだそれは! こちらはみんなで一緒に食事の時に、その後昼寝だから乾杯しようと思ってただけじゃないか!」話しながら、口惜しくて情けなくて涙を溜めて怒りまくってしまった。でも、怒りながら気づいた。「一言、私が昼食後に一緒に飲もうねと言えばよかった。そうしなかったから、あなたたちも誤解したのね。私も悪かった」と言うと、赤い顔のサブ・チーフも寝たふりの二人も、「アッフアン、アッフアン(ごめんごめん)」と、恐縮してしまった。「いいや、もう一度、この客人の歓迎を兼ねてご飯作りから一緒にやろう!」こうして、彼らと和解した。彼らは率直で根に持ったりしない。

彼らは難民キャンプ育ちで、苦勞してきた人たちだ。そして、重要な戦闘やゲリラ戦で名を挙げた人たちだ。それが、「警備役」では聞えないので、南部戦線に戻してもらいたいと屈折している気分がある。そこに、まだよく知らないレッド・アーミーの仲間の防衛を言いつけられて、うれしくて期待していた。それなのに、

ウイスキー——つ同志的に飲もうとしないのか?! と、サブチーフは頭に来てしまったのだと弁解した。

その日の喧嘩から、お互いのやり方、言い合いが逆にできるようになった。そして、ずっと本音の通じる戦友になった。この3人のうち2人は、ニザール丸岡の友人の誘いで、74年のシンガポール作戦に連続したクウェート日本大使館占領にも出撃した。後に私たちがPFLPから独立する時、自分たちも加わると言ってきた仲間意識の強い人たちである。彼らのうちひとり、82年のペイルートへのイスラエルの侵略の時に、英雄的に闘い戦死している。

本音で語り合えるようになってすぐ後に、この山荘で事件が起きた。ベランダから、まだ曳光弾が見えたので、「キャンプ戦争」の5月か6月のことだった。夜8時か9時、突然間近に銃撃戦がはじまった。一瞬のように短い撃ち合いだった。「お庭番」たちが応戦したようだった。教科書どおりのように、2階の灯りの点いた部屋に銃弾が撃ちこまれて、シャンデリアがガシャンと音を立てた。車の音がして、すぐ静まった。

私たちはいつも指示されているように、自衛のプレーニングとクラシンコーフで武装し、部屋の隅のトイレに近い方に伏せた。また、車の音。「お庭番」が上ってきて、「すぐに移動せよ」と言う。寝ているメイをキャリーボックスに入れて、非常時用にいつも備えているバッグを担いで、慌てて指示に従った。私もその頃には、普通くらいには歩くことができるようになっていた。

降りると、この山荘のオーナーがガウン姿で駆けつけてきたところだった。この人には、すでにメイが生まれた病院で会って挨拶している。アメリカン大学近くの病院が入院の費用を清算しようとしたら、一銭も取らないと言うので驚きもめた。その時、彼も居合わせた。「リッダ闘争を闘った日本人たちには、お礼を言いたいのはこちらの方だ」と言って、一切入院費用を取ろうとしない。

ペイルートはフランス式で、病院はホテルのような施設の提供をする。ドクターは自分のかかり付けの患者を入院させて、手術を準備する。私のドクターはハバシユのクラスメートの医者で、女性の産婦人科医だった。PFLPのリーダーやこうしたレパノンのANMのメンバーが信頼している病院だったのだから、皆秘密を守りながら、出産を支えてくれていたのだった。そんな訳で、一銭も払わないのは気が済まないからと私が主張して、気持ちの分だけ費用を少し払ったこと

があった。

その日、ちょうどPFLPの人と山荘のオーナーが見舞いに来てくれ、顔を合わせていたので、顔見知りではあった。山荘のオーナーは緊張した顔をほころばせて、乗りなさいと促し、メイの頬をなでた。メイは我れ聞せずと眠ったまま。5分も走らないうちに、山荘のオーナーの別の屋敷に着いた。その家はやはり山の中腹にあり、後ろは絶壁のような所に建つ大きな家だった。そこに彼は住んでいるようだった。生活しているらしく、こちらには何人もの家族の女性たちが居た。「心配しないで、今山荘付近を調べているから。何があるのか分からないので、避難した。すぐ、部屋を準備してあるから、あの山荘と同じように使ってください」と言う。

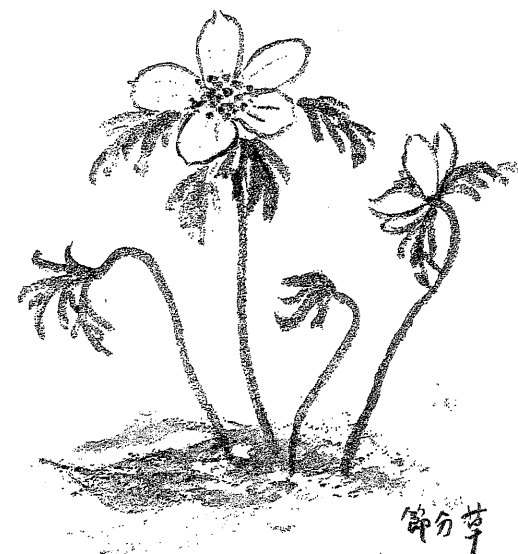
とにかく、手持ちの物を部屋に運んで待った。何の様子も分からないし、夜だ。山荘の多いアレイ地区あたりは、漆黒の闇になる。私たちが口出ししても役にも立たず、邪魔になるだろう。寝ることにした。ミルクの準備をしたりして寝た。そのまま朝まで、不穏な動きのことを何も知ることはなかった。

朝になって分かったのは、フィルフィル荘から直線距離で、100メートルほど先の山荘の動きが怪しいと、近頃PFLP側が目をつけて、監視していたらしい。もちろん、PFLPは、モサドの拠点として疑い、双眼鏡やら接近やらで探っていたようだった。そこは湾岸の首長国の王族のファミリーが借りているという。ところが、こちらの動きが相手からも不審に思われたらしい。

結局、こちらの山荘のオーナーに頼んで、向こうの山荘のオーナーに話して、チェックしてもらい、様子を探っている最中だったようだ。こうした過程で、こちらがつけられたのか、とにかくフィルフィル荘の側に接近戦を仕掛けて挑発してきたので、銃撃戦になったのだった。

その後、夜中地域の私兵民兵が立会い調べたら、敵ではないことが判明したという。そこは、ファタハのアブ・イヤードらの「黒い9月」の新しい拠点だということが分かった。こちらが偵察に行ったのを把握して、挑発しに来たのだった。アブ・イヤードらも、フィルフィル荘を怪しいモサドの住み家ではないかと疑っていたのだということが分かった。

そんな訳で、緊急避難は解除された。しかし、もうこの一件で遅くない時期に住民の中に噂が立ち、両山荘ともモサドの知るところとなるだろう、と言われて



いた。敵ではないし、土地の人たちの自衛組織はしっかりして問題はないが、情報が流れればモサドの暗殺や空爆が問題だった。

結局、その時にはオーナーの家から、またフィルフィル荘に戻った。そして、体調も良くなったし、キャンプ戦争も停戦合意をして後、イラクに戻ることにした。ところが、フィルフィル荘からイラクにさあ出発という6月下旬の前日に、行く先のイラクで、クーデターが起こった。そして、足止めを食うことになった。そのため、イラクに出発したのは、7月になってしまった。

後に74年、75年には、このアレイの山荘を私たちはもう使っていなかったが、PFLPの拠点ということで、イスラエルの空爆を受けた。この時ちょうどそこに居た国際関係局のパレスチナ移民のチリ人女性たちが被害にあった。幸いだったのは、敵の攻撃がそれて、プールの中に爆弾が落ちたために、家は少し破壊されただけだった。もし、直撃だったら家は全壊し、全員殺されていただろう。何人かがガラスなどの破片で軽症を負って、病院に運ばれたが、命は助かった。以来フィルフィル荘は立て直された。そして、本物の王族の高額な別荘に貸し出していると聞いた。

こんな山荘事件のどたばたの後で、ペイルートのキャンプ戦争の停戦が6月に成立して、仲間たちがペイルートからフィルフィル荘に来た。日本人同士久しぶりの再会。新しい命を授かった仲間メイも居る。メイを変わりばんこにケアしながら、語り合った。そんな家族のような間柄だった。(つづく)

## 面会について

調整なしに面会に行っても、予定している面会者とぶつかれば会えないことになります。

以下の要領にしたがって、より多くの方が無駄なく面会できますよう、ご協力ください。

- ・面会は1日につき1組（3人まで）しか許可されていません。
- ・面会時間は、2分ずつ伸びて、午前中は12分、午後は10分です。時間を有効に使う工夫が必要です。
- ・面会者自身を証明するもの、運転免許証・健康保険証などを持参してください。

曜日——重信さんとの関係（調整担当者）

★月曜日——明治大学の友人・知人（小川健）

★火・水曜日——一般（山本万里子）

★木・金曜日——親族と一般（大谷みどり）

\*山本万里子 TEL:090-4367-5389 E-mail: mariko481@hotmail.com

\*大谷みどり 携帯メール: midorinokeitai@docomo.ne.jp E-mail: the-5th-element@hotmail.co.jp

\*トラブルを避けるため、重信さんには事前に面会予定日と面会者名を伝えておきます。1週間前には上記担当者と調整してください。無調整で直接行っても、重信さんはその人に会うと、予定者と会えなくなるので拒否せざるを得ません。また面会予定が不都合になった時はできるだけ早く調整者にご連絡ください。

## 後記

重信さんの腫瘍マーカーの数値がまたまた上がったとのこと。体調は悪くなさそうで、数値が上がるのがなぜだか分からないままですが、とりあえず、新しく別の抗癌剤の投薬を加えるとのこと。辛そうな副作用があるようですが、これまでの経験では、副作用が減った時に薬の効果もなくなったように思えるので、新しい薬の追加で治療効果が出ることを祈りたいです。

最高裁の判決がいつ出るのか予測がつかないというのは、被告本人にとっては非常に落ち着かないものです。まして、癌手術後の治療中でありながら、様々の執筆依頼があり、重信さんはそれらの作業を抱えて奮闘中です。編集室でも、彼女に体を休めてほしいと願いつつ、同時に、執筆や校正作業をせかせるという矛盾した依頼をしながら、作業を進めています。

編集室では、いろんな方からの希望や要請を受けて、彼女への判決が出た後も、少なくとも「アラブ物語」を継続して発表していくために、発行回数を減らしても、「オリーブの樹」を発行しつづける意向でおります。読者の皆様からの声のページも拡大したいと思っています。どうぞ、今後とも皆様のご支援をお願いします。

「独居より」の中にも書かれています。1月30日の日比谷公園での「普天間基地はいらない」という集会とデモについて、関西の「支える会」の森本さんから、その様子を知らせていただきました。楽しい集会の様子がよく分かると思います。ここに、未来を切り開く闘いの一つの姿があるのではないかと思います。

その後、重信さんへの面会のため上京された森本さんや関西の「支える会」の方々とお話する機会がありました。重信さんの下獄後の支援体制を見据えて、東京と関西の「支える会」が協力しながら、重信救援を支えていく方向を話し合いました。仲間が広がることは何よりも心強いものです。共に力を合わせていきましょう。 Y

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル4階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

銀行口座 三井住友銀行 赤羽支店 226-3687269 オリーブの樹

[www.geocities.jp/setfreemarian/index.html](http://www.geocities.jp/setfreemarian/index.html)

頒布価格 500円

## 「正誤」表

### 第96号

- |                  |  |
|------------------|--|
| ①4P下から8行目        | <u>「第三小法廷」</u> → <u>「第二小法廷」</u>        |
| ②5P右上から4行目       | <u>もう入試もはじまります。</u> →(削除)              |
| ③5P右上から19行目      | その <u>直後の</u> →その <u>直後の2月2日に</u> (挿入) |
| ④5P右上から25行目      | <u>言い訳</u> → <u>申し訳</u>                |
| ⑤5P右下から11行目      | <u>逃走</u> → <u>独走</u>                  |
| ⑥5P右下から2行～3行目    | <u>「駆けつけて、よく仲裁してくれました」</u> →(削除)       |
| ⑦7P右上から11行目      | <u>供述所</u> → <u>供述書</u>                |
| ⑧9P左下から14行目      | <u>到らない</u> → <u>至らない</u>              |
| ⑨10P左上から11行～13行目 | <u>立った</u> → <u>たった</u>                |
| ⑩11P左下から3行目      | <u>耽々と</u> → <u>淡々と</u>                |
| ⑪11P右上から4行目      | <u>検察と</u> → <u>検察が</u>                |